言語研究（*Gengo Kenkyu*）**144**: 29–53（2013）

意味的分類の科学的妥当性

守　田　貴　弘
東洋大学

【要旨】本論文は，言語学におけるさまざまな分類の根拠を問うこと，特に，意味に基づく分類がいかにして正当化されるのか検討することを目的としている。言語学は科学の一種だと考えられている。しかし，言語学におけるすべての分類が「何らかの操作を行い，その操作に対する同質かつ恒常的な反応によって分類を決定する」という科学的要請に応えているわけではない。特に，意味的分類は検証可能な分類基準を設定することが難しく，科学性を保持することが困難であるにも関わらず，現在の言語研究ではほとんど不可欠である。では，何がこの意味的分類を正当化してくれるのだろうか。本論文では，意味的分類を支えてくれる条件として，(1)分類の動機が研究者の間で共有されることと，(2)当該の分類によって現象がより良く説明され，他の現象に対しても一定の説明力を有することの 2 点を提案する *。

キーワード：自然分類，人為分類，意味的分類，科学性，共有可能性

1. 導入

学問の第一歩は分類という行為によって踏み出されると言っても過言ではない。生物学の対象となる植物や動物は DNA の類似性によって分類され，物理学や化学の基礎となる元素は質量に基づく周期表にしたがってその性質が整理される。そして，研究対象を一定の分類にしたがって分析するという手法については言語学も例外ではない。言語学における分類としては品詞分類が最たるものであり，これはサンスクリット語の文法書を残したパーニニや，ギリシャ語文法（τήχνη γραμματική）を著したトラクスの時代から受け継がれている。また，現在の研究書においても，知覚動詞，心理動詞，移動動詞，思考動詞といった動詞カテゴリによって研究対象を画定する方法は一般的であり，SVO や SOV といった基本語順や，主要部標識言語／従属部標識言語（head marking/dependent marking）といった類型論的なカテゴリもある。

ただし，すべてのカテゴリについて分類基準が明確というわけではない。たとえば，日本語の移動表現を考えたとき，「潜り込む」と言えば「潜る」が移動様態を表しているように思えるが，「机の下に潜る」のときは移動経路を表しているよう

* 本論文は 2011 年度日本フランス語フランス文学会秋季大会（小樽商科大学）におけるワークショップでの発表「分類の戯れ，言語学の目的」を大幅に改稿したものである。本論文の準備にあたって，査読者ならびに編集委員会から内容および形式に関して詳細なコメントを頂いた。ここに記して感謝申し上げる。言うまでもなく，本論文の不備の責任はすべて筆者にある。

に感じられるなど，なかなか判断がつかないこともある。「この動詞はどのカテゴリに入れるべきなのか」と，科学的分析の端緒に位置する分類で悩んでしまうことになる。ここから，「言語学は科学であることを前提としているにも関わらず，そもそも言語学では分類に基準がないのではないか」「言語学で採用されている慣習的な分類に何となくしたがっているが，それはつまり，直観的な意味分類にしたがっているだけではないか」という疑問が生じてしまう。さらに，この疑問は「ある研究分野のみで通用する分類であれば，それは理論内的な要請に応えるものであって，言語学が本来対象とすべき言語の姿を反映したものではないのではないか」というように，より根源的な疑問にも発展してしまう。言語学は科学の一分野であるとされているにも関わらず，科学としての言語学という前提が崩れてしまう疑問であると同時に，言語学という学問が，結局，何を対象とし，何を目的としているのかも分からなくなるのである。

本論文の目的は，言語学で使われている各種分類の妥当性を問い直すことであり，特に，意味に基づく分類がいかにして正当化されるのかを検討することにある。詳しくは次節以降で論じるように，言語学が科学であろうとするならば，満たさなければならない科学的要請がある。科学哲学的には，ある分類が自然の性質を反映しているとみなせるものなのか，それとも理論内的な要請や研究手法にとって必要な，人為的あるいは技巧的なものに過ぎないのかという問いを立てることができる。この問いの中で，言語の意味という要素は避けて通ることのできない問題を孕んでいる。意味に基づく分類は言語学の一般的な手法となっているが，その根拠はやはり，言語学の科学的性質という観点から問う必要があり，科学的でないならば，どのように正当化できるのか検討されなければならない。

具体的な分析方法としては，言語学における出版物あるいは口頭発表を対象として，実際に提示されたカテゴリまたは分類という行為の背後にある研究目的を検討するという手法をとる。以下，第 2 節で，科学的研究において分類を行うときの基本原理，基本的な要請を確認した後，第 3 節では個別の分類例を検討する。科学的な分類，科学的ではないが説得力を持ちうるものとそうではないもの，そして分類そのものが研究目的となっているものなど，さまざまな実例を扱うことにする。最後に，第 4 節では，言語学における分類にとって必要な条件をまとめるとともに，分類の検討を通して見えてくる「言語学は科学なのか」「言語学の目的は何なのか」という問いに対する答えを提案することにしたい。

2. 科学で求められる分類

分類を行うためにはどのような基準でも設定することができる。たとえば，私たちは一般的な知識として，チューリップというカテゴリには赤や白や黄色だけではなく，さまざまな色の花が含まれることを知っている。しかしなぜ，見た目に歴然と異なる色であっても同じ植物に分類しているのだろうか。ヒマワリとタンポポ，菜の花と黄色いチューリップが一つのカテゴリとなるように分類してもいいのでは

ないか。実際のところ，このような色彩による分類を否定する絶対的な根拠は存在しない。現在ではほとんどないかもしれないが，顔料の採取などを目的とした場合には，同系統の色の植物を集めるということはさほど不思議な行為とも思えず，むしろ正当化されるはずである。

だが通常，この色彩に基づく分類は，ある特殊な目的の下でのみ正当化されるものであって，モノのカテゴリを考えるときには採用されない。ユリ科植物であるチューリップ，キク科植物のタンポポ，アブラナ科の菜の花，そして同じキク科であってもタンポポとは亜科のレベルで区別されるヒマワリというように，色彩よりも植物学的な特徴にしたがった分類の方が自然の性質を反映しているとみなされるのが普通である。他の例も挙げよう。元素は質量に基づく周期表にしたがって分類されているが，別の観点から「人体を構成する物質」「原子炉や航空機の機体を作るのに適した物質」というように分類することもできる。そして，やはりこれらの分類が物質の性質を反映していると見なされることはない。動物種である哺乳類や魚類，甲殻動物などをまとめる「魚介類」，食品生産や流通上の分類として設けられる「野菜」や「果物」，「果実的野菜」といったカテゴリも人間の都合で設けられた行政上の分類であり，モノ自体のカテゴリとは見なされない。

このように，分類という行為は一定の目的にしたがって行われる行為であり，その目的はさまざまに設定することができる。一方では，顔料の採取を目的として色を分類基準にすることもあれば，国民生活の安定を目的として野菜を基本作物とそれ以外に分けることもある。これらは，人間の何らかの都合で設定された目的に基づく人為分類である。他方，人の都合など関係なく，花のつけ方や茎の形状などを基準とする，「対象を知る」という欲求に根ざした分類も存在する。対象の性質を反映していると考えられる自然分類である。人為分類と自然分類の間には歴然とした差がありそうだが，分類にあたって人間の目を介しているため，両者をそこまで明確に区別できるわけではない。どちらのタイプの分類であれ，分類されるのは「対象の本質」などではなく，「我々と対象の関係によって設定される質」である（cf. Condillac 1746, 第 1 部 5 章 3 節，山口 2002: 82–93）。人間が何かの都合で行った便宜的分類なのか，それとも自然を理解しようとして行った分類なのか。人間側の「理解」にしたがっている点で自然分類と人為分類の区別は自明とは言えないことになる。しかし，科学的研究で求められる分類が自然分類であることは上述の例からも明らかだろう。つまり，自然の仕組みを理解するという目的のもと，対象に何らかの操作を行い，その結果の恒常性をもって（少なくとも当該操作に等しく反応するという点で）同質であると認められたものが，科学的要請に応えた分類ということになる。

では，言語学においては，分類という行為を行うにあたってどのような質が私たちと対象の間に設定されており，またどのような質が設定されるべきなのだろうか。言うまでもなく，現在の言語学は「言語科学」という呼び名が用いられることがあることからも分かるように，科学であることを前提として，もしくは科学を志

向するものとして研究が進められている。したがって，言語を客観的に存在する研究対象と見立て，科学を標榜する以上，言語学における各種分類も自然分類を目指すべきだということになる。いくら「対象と人間の間に設定される質」だといっても，勝手気ままではなく，あるいは人間の都合による便宜ではなく，一定の操作に基づく同質かつ恒常的な観察結果にしたがって分類を決定しなければならない。

言語学で実際に使われている各種分類は本当に自然分類なのだろうか。次節からはさまざまな実例を検討していくことにしよう。なお，検討に用いる分類例は出版物からの引用を中心とするが，検討すべき対象のサイズと紙幅の関係を考慮し，口頭発表あるいは進行中のプロジェクト等を引用することもある。これは，もっぱら議論を簡潔に進めるためであり，類似の分類は他の多くの論文や著作にも見出される。決して典型例として引用するものではないことを断っておく。

3. 言語学における分類の諸相

自然分類と人為分類にひとまず線を引くと，言語学が科学を志向しているのであれば自然分類を目標としなければならないという要請が発生する。では，実際に言語学で行われている分類は果たして自然分類であり，言語を記述・理解する上で必要なものだと言えるのだろうか。何が分類を支える根拠となっているのだろうか。本節では，さまざまな実例を検討していくことにしよう。

3.1. 意味に拠らない分類――品詞の実在性

冒頭で述べたように，パーニニ，トラクス以降，品詞分類は古くから受け継がれてきており，現在の言語学でも必須のカテゴリとなっている。しかし，何が品詞分類の根拠となっているのだろうか。名詞はモノの名を表し，動詞は動作を表し……といった内包的定義は分類を保証してくれるものではない。このような定義は最初に行うべきものではなく，適切な操作を行って結果を観察し，その結果に対して後で貼られるラベルの注意書きのようなものに過ぎない。

では何が品詞分類を保証してくれるのだろうか。理論的な立場によって異なる見解もあるかもしれないが，範列関係（paradigmatic relation）および連辞関係（syntagmatic relation）が品詞分類の決定にあたって中心的な役割を果たしていると考えることができるだろう。たとえば，ある言語における正しい文が 3 つの語から構成されており (e.g. I like Lucy), その文が正しくなる規則を検討しているとしよう。もし最初の語と置換しても正しい文を構成する語があれば，その語は最初の語と同質性を備えていると考えることができる（e.g. You like Lucy)。当然，この手法は 2 番目，3 番目の語についても行うことができる（e.g. I hit Lucy, I like Stefanie)。さらに，2 番目の語と 3 番目の語を入れ替えると正しい文ではなくなるといった観察結果があるときにも（e.g. *I Lucy like)，それらの語が異なるカテゴリに属する根拠とすることができる。同じ性質の語だけ並べても文にはならず，並べ方によっては適格な文にも非文にもなる。このような観察結果をもって語同士の同質性を見極める

ことができる。以上のように，正しい文を作り出すために必要な知識は，まずは範列関係および連辞関係によって正当化することができると考えられ，その確からしさ故に，古典とも言える品詞分類が現在まで変わることなく継承されていると言うこともできる。名詞や動詞といったカテゴリの名は重要ではなく，カテゴリ A，カテゴリ B のような無機質な名称であっても差し支えない。

このように，品詞のような基礎的な統語的カテゴリに関する限り，その存在を正当化するための観察可能かつ検証可能な方法があると考えることができる。そして，品詞を超える単位を問題とする場合にも，この発想は有効である。次の文を比較してみよう。

(1)　a.　Paul bought a book.
　　b.　My friend bought a new book.

(1a) を品詞情報のみに基づいて規則化するならば，S→N V D N（S：文，N：名詞，V：動詞，D：限定詞とする）と書くことができる。上述した品詞の同定手続に照らして考えるならば，最初の N は他の固有名詞や，I や he で置き換えることができるため，これらが一つのカテゴリを形成すると考えることができる。二つ目の動詞 bought は read や found と置換可能であり，「本を読んだ／見つけた」という文を構成することができるため，bought，read，found が同じカテゴリに含まれることも分かる。同様に，a は the とカテゴリを形成し，book は pen などと置き換えることができる。このような検討の結果，S→N V D N という規則の正しさを確認することができる。

だが，品詞情報のみで構成されたこの規則は（1b）には適用できない。この文を品詞のみで規則化するならば，S→D N V D A N（A：形容詞とする）となるが，これは私たちが（1a）と（1b）に対して抱く直観的な類似性を捉えきれていないばかりか，このような発想で規則を設定しても，ほとんど文の数だけ規則が必要となることが予想される。そこで，Paul と my friend，a book と a new book の間にある同質性を認めることが必要となる。すなわち，語を超えた句というまとまりを設定する必要性である。ここでもやはり，品詞の認定と同様の手続を経て，その存在を正当化することができると考えられる。(1a) の Paul を my friend で，a book を形容詞の付いている a new book と置き換えても文法性を保持することができることから，名詞句という単位を設定することができる。

トラクスから継承している 8 品詞分類は，名詞，代名詞，動詞，形容詞，副詞，接続詞，前置詞，そして間投詞からなる。分け方によっては 10 品詞になることもあり，間投詞の代わりに冠詞を含めることがあるなど，個別言語の事情によって違いが生じることはあるが，8 品詞または 10 品詞にしようという意識が受け継がれている。そして，この大分類だけでは十分ではないため，下位分類も設定されるのが普通である。名詞であれば固有名詞と普通名詞，複数形になるものとならないもの，男性／女性／中性といった性などによって分けることができ，代名詞も主語と

して機能する場合，直接目的補語，間接目的補語として使われる場合というように，形態・統語的な基準によって下位分類が行われている。当然のことだが，下位分類に含まれる成員は上位分類を規定する性質を共通して備えており，下位分類を認めるために必要な特徴にしたがって細分化されている。

このような分類設定の手続きに科学としての問題があるとは考えられない。文中での一定の操作と，その観察結果によって設定できる同質性に基づくカテゴリであり，科学的手法を踏まえた自然分類だと言えそうである。

ところが，統語的な分布に基づく分類手続を踏んだ場合，二つのカテゴリにまたがる語も少なくはないということが問題視される可能性がある。次の例を検討してみよう。

(2)　a.　He walked in the room.
　　b.　He walked in with a handgun strapped to his waist.
(Mail Online News, Dec 28, 2012)

名詞句というカテゴリが既に同定できている地点から話を始めるならば，(2a) では in の後に名詞句 the room が後続しているため，in は前置詞という扱いになる。他方，(2b) においては in が名詞句をしたがえていないため，分布に基づくなら，動詞が表す動きに方向性を与える副詞と判断されることになる[1]。問題は，ここで「in の本当のカテゴリは何なのか」と問うことに意味があるのかどうかということである。あるいは，「一つの形式が二つの別々のカテゴリに分類されるような基準を用いることに，どの程度の妥当性があるのだろうか」と問うことに，問いとしての妥当性はあるのだろうか。

実のところ，これは疑似問題に過ぎないように思われる。動詞は to 不定詞として使われたときには名詞としての機能を果たし，分詞となれば形容詞としての機能を果たす。形容詞にも，名詞を修飾するだけではなく，コピュラを伴って述語になるものとそうではないもの，冠詞を伴って名詞として使われるものとそうではないものがあるように，統語的に異なる環境で現れるものがある。一つの形式がさまざまな分布で現れ，複数の機能を担うことがあるということであり，このこと自体は何ら不思議ではない。ある記号は，ある言語環境では副詞のように振舞い，またあるときには名詞として使われる。同じ音形を持った記号が複数の位置に現れるというだけのことである。

そもそも，範列関係や連辞関係といった統語的分布によって品詞を特定するという試みは，直接的に言語記号そのものを分類しているのではなく，分布に基づく文中での機能を根拠として分類を行うことである。ある形式が「本当はどの品詞なのか」と問うことは，この分類の根拠となる「文中での機能」という基準をあからさ

[1] 副詞として扱わない立場の代表格が 3.2 で扱う Talmy (2000) であり，Talmy では衛星 (satellite) ――動詞周辺要素――という地位を与えられている。

まに無視している。また，一つの形式が二つ以上の環境で現れてはならない，すなわち，二つ以上の機能を持っていてはならないという限定もない。「本当の品詞」という問いはこれらの前提を無視した問いの立て方となっているため意味をなさないのである。

さらに，ある形式が二つ以上の環境で現れるからといって，ただちに分類方法に問題があると判断するわけにもいかない。Kuhn（1962: 50）では，次の思考実験的エピソードが紹介されている。

> ある人が，科学者が原子論についてどう考えているかを知ろうとして，有名な物理学者と化学者に，ヘリウム原子は分子であるのか，ないのか，と聞いたとしよう。二人とも躊躇なく答えたが，その答は同じではなかった。化学者にとっては，ヘリウム原子は気体運動論に関して分子のような性状を呈するから分子であった。一方，物理学者にとっては，ヘリウムは分子スペクトルを示さないから分子ではなかった。おそらく二人共同じ粒子について語っていたのだが，彼らは自分たちの慣行を通してそれを見ていたのだ。

確かに，(2) の場合には，統語的分布という一つの基準に基づいていても二つの品詞に分類せざるをえないものがあるという事情を抱えており，ヘリウムの場合には，気体運動論と分子スペクトルという二つの基準が使われているという事情があるため，二つのケースの間に違いはある。だが，「本当の品詞は何なのだろうか」という問いが意味をなすためには，統語的分布による機能の判定という基準とは別の基準が必要となり，「ヘリウムの本性は何なのか」と問うためには，やはり現行の分類基準を超えた何かが必要になるという要請は通底していると考えることができる。今ある世界観とは別の世界が開けなければならないのである。そして，ヘリウムの存在によって分子スペクトルや気体運動論という概念を完全に否定してしまうことができないように，二つのカテゴリにまたがる語があるからといって，範列関係や連辞関係といった基本性質が言語に存在することを否定することもできない。他の要素の分類に問題が生じていないのであれば，たとえ二つのカテゴリにまたがるものがあっても，現在の分類基準を根底から否定するようなことがあってはならないだろう。

伝統的に使われてきた品詞の分類やその下位分類，派生接辞と屈折接辞といった品詞分類にも関与する形態論的カテゴリ，さらに句のような統語的なまとまりは言語の記述に必要であり，統語的分布や形態的特徴という，一定の操作に対する恒常的な反応（正例か非文か）に基づいていると見ることができる。科学的要請に応えた，一つの自然分類だと考えられるだろう。

3.2. 意味による分類はどこまで可能か——動詞分類とその正当性

前節では分布によって品詞分類を行うことの科学的正当性を確認した。ここからは，分布ではなく，意味がより中心的な役割を果たしている動詞分類の例を検討し，

その根拠を考察していくことにしよう。

大規模な動詞分類の研究としては Levin（1993）を挙げることができる。ここでは英語の動詞の網羅的なリストが提示されており，その分類は，項構造や項構造の交替現象という形式面が重要な基準となりながらも，意味が動詞の大分類を決定する上で決定的な役割を果たしている。

Verbs of obtaining というカテゴリの一部を紹介しよう。

(3)　Verbs of obtaining
　　Get verbs
　　Class Members: book, buy, call, cash, catch, fetch, find, gain, get, hire…
　　Properties: Benefactive Alternation
　　a. Carmen bought a dress for Mary.
　　b. Carmen bought Mary a dress.
　　Obtain verbs
　　Class Members: accept, acquire, appropriate, borrow, obtain, receive…
　　Properties: Benefactive Alternation
　　a. Carmen obtained a spare part for Mary.
　　b.*Carmen obtained Mary a spare part.　(Levin 1993: 141–143)

一見して，意味的な類似性によって大分類（verbs of obtaining）を設定し，その中でも受益者交替（benefactive alternation）や与格交替（dative alternation）が可能かどうかといった統語的特性によって下位分類（*get* verbs, *obtain* verbs）を設けるという手法が取られていることが分かる。その他の項構造に関わる特徴も複数挙げられているが，ここでは受益者交替が可能かどうかという点で明確な区別が設けられている（Levin 1993: 141–143）。もし，統語的な特徴を分類基準として優先させた場合，受益者交替の可否などによって検証可能なカテゴリを形成することはできるだろうが，やはり意味的に雑多な集合となってしまうことは避けられなくなることは容易に想像できる。

動詞の分類そのものを目的とした研究ではなく，また Levin（1993）ほど網羅的でなくとも，研究対象を限定するために動詞のカテゴリを提示するという手法は一般的に用いられている。少し例を挙げよう。

(4) a. 思考動詞[2]：思う，考える，信じる，疑う，思い出す，恥じる
　　（寺村 1982: 176）
　　b. 知覚動詞：見る，見守る，見つける，見出す，目にする，聞く，耳にする，匂う，感じる　（寺村 1982: 176）

[2] 寺村（1982）での分類名は「思考作用」だが，ここでは他の動詞との統一を考えて「思考動詞」とし，動詞例の表記も片仮名から平仮名に改めた。

c. 移動動詞：(i) 行く，来る，登る，下る，上がる，下がる，降りる，落ちる，沈む，戻る，帰る，進む
(ii) 越える，渡る，通る，過ぎる，抜ける，横切る，曲がる，くぐる，回る，巡る，寄る，通過する，入る，出る，至る，達する，着く，到着する，去る，離れる，出発する
(iii) 歩く，走る，駆ける，這う，滑る，転がる，跳ねる，舞う，泳ぐ，飛ぶ，潜る，流れる，急ぐ　（松本 1997: 141-143）

d. 引用動詞：（平叙文）言う，述べる，伝える，思う，考える，気づく，（疑問文）尋ねる，聞く，問う，疑う，（命令文）命令する，頼む，依頼する，お願いする，（感嘆文）びっくりする，嘆く，喚く，騒ぐ
（鎌田 2000: 42）

e. 変化動詞[3] A：なる，変る，化ける，扮する，なりさがる
B：分かれる，分裂する，伸びる，ちぢむ，増える，減る，まとまる，割れる，上がる，昇進する，落ちる，染まる，かたまる，改まる，発展する，生まれかわる，決まる （寺村 1982: 121）

（4）の分類のうち，引用動詞は「と」による補文節がとれるかどうかという統語的基準に基づいていると判断できる。一方，その他の分類では，動詞が取りうる項構造のような，検証可能な基準に基づいて分類が行われているわけではなさそうである。「思う」や「考える」は思考動詞でありながら引用動詞でもあり，「落ちる」は変化動詞 B でありながら移動動詞でもある。もちろん，品詞分類のときと同様に，一つの形式が二つ以上のカテゴリに分類されることがあっても問題ない。しかし，まずはこれらの分類の根拠を検討しなければならない。

端的に言って，分類の根拠は意味の理解以外にはありえないだろう。（4）に挙げたカテゴリは動詞の分類を装ってはいるが，実は寺村（1982）が言う「コトの類型」であり，ある動詞が，典型的な主語や補語とともに用いられた結果として表すことになる事象の分類である[4]。「太郎が試験に落ちる」は変化動詞かもしれないが，「太郎が木から落ちる」は移動である。要するに，主語や補語の性質など，文全体が表す意味を理解した上で，そこで使われている動詞について「思考」や「移動」，「変化」といったラベルが用意されているに過ぎないと判断することができる。つまり，これらの動詞分類は，事象に対する私たちの理解に支えられており，その意味では直観的な分類の域を出るものではない。「太郎が地面に落ちる」というように，移

[3] 寺村（1982）での分類名は「変化『ナル』類」だが，ここでは他の動詞との統一を考えて「変化動詞」とし，動詞例の表記も片仮名から平仮名に改めた。

[4] 言語習得のことを考えても，「落ちる」という動詞を単独で学習しているとは考えられない。語は文中で使われて初めて意味を持ち，原理的には実際に使われたときの意味にしかアクセスすることができないはずである。動詞の意味と考えられているのは複数の用例に共通する抽象化された意味であり，動詞が単独でこのような抽象的な意味を持ち，分類することができると考えるのは言語学者の幻想あるいはこの分野での慣習に過ぎない。

動の意味でも変化動詞の場合と同じ項構造を取ることができるため，品詞分類と比べると，形式的で検証可能な分類基準があるとは言えない。科学的要請に応えた自然分類ではない，非常に不安定な分類である。

だが，このような手法による研究対象の画定は，言語学においてはほとんど常套手段であり，完全に捨て去ることは難しいという側面もある。上の例では，「試験」と「地面」の意味に依存して「落ちる」の分類が左右されるわけだが，このような意味による分類の根拠はどこに求められるのだろうか。

（4）のような分類では，各カテゴリを設定することによってどれだけの現象を説明することができるのかという普遍性，あるいは，普遍性という名が強過ぎるなら，共有可能性が問題になると考えられる。いくら意味を基準とする分類であっても，カテゴリのメンバーの間に確かな類似性があり，分類自体を他の研究者と難なく共有することができ，さらに，その分類を設定することによって当該の現象がよりよく説明され，他の現象に対しても一定の説明力を発揮するのであれば，必ずしも恣意的，技巧的あるいは人為的な分類とは言えないだろう。むしろ，その分類は言語の何らかの姿を反映していると考えることができる。

このような普遍性をある程度，獲得している例として，Talmy（2000）による類型論を取りあげよう。この類型論は移動表現の類型論として知られているものであり，移動を構成する「経路」（path），「移動物」（figure），「基準物」（ground）といった諸概念のうち，経路がどの統語要素によって表現されるかという基準にしたがって言語の分類が行われている。

（5）　a.　The bottle floated out of the cave.
　　b.　La botella salió de la cueva flotando.
　　the bottle exited of the cave floating
（Talmy 2000: 224，スペイン語のグロスは筆者による）

英語（5a）とスペイン語（5b）で表現されている内容に違いはないという前提に立つならば，同一内容を表すために，英語では主動詞が移動様態を表しているのに対し，洞窟の中から外へという移動経路は動詞の衛星（satellite）である out によって表されている。すなわち，衛星枠付け言語（satellite-framed language）である。（5b）では意味と形式の対応関係が逆転し，経路が主動詞で表されるため，スペイン語は動詞枠付け言語（verb-framed language）に分類される。

この分類方法にしたがうと，発生的・地理的な類縁性とは関係なく，世界の言語が（6）にあげた二つの類型にまとめられることが特筆すべき特徴となっている。

（6）　a.　衛星枠付け言語
　　ロマンス系を除くインド・ヨーロッパ諸語，フィン・ウゴル諸語，中国語，
　　オジブワ語，ワルピリ語

b.　動詞枠付け言語
ロマンス諸語，セム系諸語，日本語，タミル語，ポリネシア諸語，バントゥー諸語，マヤ系言語の一部，ネズパース語，カド語

この類型論の意味するところは何なのだろうか。確かに移動経路を表す形態・統語的要素という基準によって（6）の類型を提示することは可能である。しかし，なぜ様態ではなく，経路でなければならないのだろうか。移動物が存在場所を変化させるときに辿る経路が分類基準だと言われても，この分野に馴染みのない人にとっては了解し難い基準だと思われる。また，第2節で確認したように，分類は目的に応じてどのようにも設定できるという性質を備えているため，この類型が勝手気ままな分類ではなく，言語の何らかの姿を反映していることを説得的に示さなければならない。つまり，（5）のような意味と形式の対応関係が観察され，その対応関係が（6）の分類結果をもたらすとしても，まずは経路という基準自体の妥当性を明らかにする必要があるのである。

私見では，この類型論にはまず，事象の時間的な輪郭を動詞で画定する言語と衛星で画定する言語という区別が設けられており，その具体的な実現形態として移動や状態変化といった個別事象があると理解することができる（経路がこの画定に参与する）[5]。さらに，衛星枠付け言語であれば結果構文が可能であるのに対し，動詞枠付け言語であれば結果構文が不可能であるといった，一定の含意的普遍性もあると考えられる。要するに，移動表現が研究対象となることが多いが，この類型論の射程はさらに広いということであり，アスペクトによる動詞の分類を事象レベルで類型論に発展させたという基本性質があると見ることができる[6]。動詞アスペクトをめぐっては，Vendler（1957）による提唱以来，さまざまな問題が指摘され，修正案も数多く提案されているのは確かである（cf. Croft 2012, Gosselin and François 1991, 岩本 2008, Smith 1997, etc.）。しかし，一定の含意的普遍性があることを考慮するならば，時間的輪郭の画定を事象レベルに適用した類型論には，ある程度の妥当性があると言うことができる。

このように，意味の理解に基づく分類，類型化であっても，当該の分類を設定することで現象がより良く説明でき，他の現象についても説明力を有しているのであれば，分類には妥当性があると考えられる。

では，このような類型にまったく問題はないのだろうか。やはり経路という，意

[5] Levin and Rappaport Hovav（1992）でも終結性（telicity）を重視した経路動詞と様態動詞の区別が行われている。

[6] Talmy の類型論は，マクロ・イベントと呼ばれる，多くの言語において単一の節で統合的に表されることの多い複合的事象を対象としており（a fundamental and recurrent category of complex event that is prone to conceptual integration and representation by a single clause. Talmy 2000: 216），マクロ・イベントには移動だけではなく，事象の時間的な輪郭づけ（temporal contouring）や状態変化なども含まれる。移動の類型論として一人歩きしているが, Talmy 自身は射程の広い類型論を想定しているはずである。

味の理解を中心とした類型論であるため，カテゴリの境界に曖昧な部分もあるように思われる。ここでは問題を二つ，検討してみることにしよう。

一つは本論文の冒頭でも触れた動詞の分類に関わるものである。この類型論においては，ある動詞が様態を表しているのか，それとも経路を表しているのかという判断が決定的に重要となる。しかし，その判断は研究者の間で常に一致するわけではなく，そもそも明確な分類基準が示されてもいないという問題がある。判断の不一致を引き起こす代表的な例としては英語の climb を挙げることができるだろう。Talmy 自身は climb を様態動詞として扱っているのに対し，この動詞は上方移動を表すことが普通であるため，経路を含んでいるという見方も存在している[7]。ある動詞に関して，使用される文中での環境に応じて経路と様態の一方が際立つということがあっても不思議ではない。一定の基準に基づいて分類を行った上で，いずれのカテゴリにも分類できないケース，あるいは両方のカテゴリにまたがる事例が出てくることは，おそらくどのような分類でも避けられない。周辺的事例は分類につきものである。しかし，研究者の間で共有されている分類基準がないまま分析がなされているのは不健全であり，分類基準がないまま研究者の間で分類が共有されても，それは個人的判断が偶然の一致を見たということ以上の意味はもたないはずである。したがって，そのような分類は対象の性質に基づく分類とは言い難い。逆に，判断が一致しないときには，どちらの個人的な意味理解が正しいのかという不毛な争いにしかならないことも想像できる。やはり，一定の分類基準は必要だと考えられる[8]。

もう一つの問題は，何を移動表現として扱うかという点でも合意がないということである。つまり，移動動詞の中での下位分類ではなく，ある言語における動詞のうち，何が移動動詞なのかという，研究対象を画定する段階での問題である（同様の問題は（4）で提示した「思考動詞」や「心理動詞」といったカテゴリを設けるときにも考慮しなければならない）。私たちの外界事象に対する理解に基づいて「移動動詞」というカテゴリを認定しているため，ある言語のすべての動詞から移動動詞のみを抽出するための形式的なテストや判断基準といったものがあるわけではないことは明らかである。Levin（1993）の分類において，意味によって大分類を設定するという手続と同様である。そこで現状では，たとえば rain のような動詞の扱いが問題となる。

Talmy（2000）によれば，rain や snow といった動詞は，経路や様態ではなく，移動物（figure）である雨や雪を包入した動詞とされている。つまり，まぎれもなく移動動詞の一種として数えられている。しかし，この移動表現の類型論に懐疑的な

---

[7] Jackendoff（1985）では，climb は様態と経路の両方を表すものとして扱われている。この動詞の分類をめぐる詳細な議論については Rappaport Hovav and Levin（2010）参照。

[8] 筆者は，この類型論が事象の時間的輪郭に関わるものであるという立場から，アスペクトに基づく分類の限界を理解した上で，基準としてはアスペクトが妥当であると考えている（cf. Morita 2009，2011）。

研究者にとっては，なぜ「雨が降る」「雪が降る」といった天候現象が移動表現になってしまうのか，大いに議論を呼ぶところだろう[9]。

(7)　a.　It rains.
　　b.　The rain falls.

雨が降るときには雨粒の移動を伴う。しかし，通常，(7a) を移動表現と考える人はいない。一般の人に「でも，it rains というときには rain（雨粒）の移動があるでしょ」と説明して，ようやく納得してもらえるかどうかというところである。逆に，同じ外界の状況について (7b) も使うことができ，こちらは移動表現とみなされがちである。ここでは，rain，fall という「動詞によって」事象の分類が行われており，外界事象に関する私たちの理解という分類基盤が部分的に捨て去られている。「fall という動詞を使っているのであれば，移動表現である」というように，fall という動詞が使われる他の典型的な移動の文脈を想定し，そこでの理解を (7b) が表す状況に適用するという，一種の密輸入が起こっていると考えられるのである。本節では既に，この種の事象分類が動詞のみで成立しているわけではなく，事象全体の理解に依存した上で，動詞に便宜的にラベルを貼っていることを確認している。動詞を予め分類しておき，動詞の方から事象を分類しようとするのは方法の逆転に他ならず，方法論的な一貫性を欠くことになる。

さらに，「雨が降るときには雨粒の移動を伴うものだ」という説明を行ってしまうと，it smells good のような文を移動表現から排除できなくなる恐れも出てくる。「移動物が必要となる現象」ということが移動表現の根拠になるのであれば，匂いのような知覚現象も分子の移動によって引き起こされていることは，現在の一般的な科学的知識では常識だからであり，動詞 smell の中に「匂い」が語彙化されているという主張を封じることはできない。おそらく，雨を移動物として認定しているのは降雨という現象から導いた論理であって，知覚そのものではない。「移動物が必要となる現象」といった意味規定ではなく，より知覚を重視した議論が必要になるのだと考えられる。

以上のように，動詞分類や事象の類型論においては，研究対象を画定する段階から直観的な意味理解に多くを負っていることは疑いえない。移動表現といったカテゴリがアプリオリに存在しているかのように想定し，厳密な分類基準などは設けないというのが通常の方法のようである。プロトタイプ理論（cf. Rosch and Lloyd 1978．認知言語学での主流の意味観であり，詳細は Taylor（2003）の第 2 章～第 4 章を参照）は必要十分条件に基づく厳密な分類の境界を求める姿勢を退けるものであり，それはすなわち，科学的な自然分類では扱いきれないものとして言語上の分類を捉えようとすることに他ならない。意味によって事象を分類・類型化しようとする試みも同様に，ある程度の曖昧性は避けられないものだと言うことができる。

[9] 天候動詞（weather verbs）というカテゴリが設定されていることもある（Ruwet 1991）。

もし科学的方法にこだわるなら，（4）のような分類は廃棄し，科学的に扱いうる範囲に研究対象を限定してしまうか，意味に対する操作可能な基準を発見･考案する，もしくは，意味の心理的実在性を検証するための何らかの手段を追求するしかなくなることが想像される[10]。

動詞分類のように，意味による事象の理解を前提とするとき，言語学は厳密には科学ではありえない。したがって，意味による分類の妥当性は科学的に検証できるものではない。カテゴリの妥当性は，他の研究者との共有可能性や他の事象に対する説明力といった，カテゴリ自体に備わる普遍性によって示すしかないと考えられる。

3.3. 意味に基づく恣意的分類

前節では，意味による分類であってもある程度の共有可能性や説明力があれば有用なカテゴリとして認めることができることを確認した。その反面，意味による分類を恣意的に行ってしまうと，他の研究者と共有することのできない分析結果を生んでしまうこともある。この種の問題を孕んだ研究には感情や評価といった心理状態を表す表現を研究対象としたものが多い。Wierzbicka（1999）などを挙げることができるが[11]，ここでは限られた紙幅で検討可能なものとして，問題点を如実に示している口頭発表を取り上げることにする[12]。

この発表は，フランス語の評価表現をテーマとしており，ブログの書き手が物事に対して評価を行うときに使う表現を収集・分析し，評価表現の中で使われる比喩的表現にどのような制約があるのか明らかにすることを目的としている。理論的な枠組みとしてはアプレイザル理論を援用し[13]，評価のあり方自体を「態度評価」（attitude），「形成・やり取り」（engagement），「程度評価」（graduation）という 3 種類に分類した上で，この研究では「態度評価」に分析対象が限定されている。さらに，態度評価は三つの下位要素の組み合わせによって構成され，各要素は詳細に下位分類されている。以下にその分類といくつかの例を引用する。

---

[10] 形式的に検証可能な基準によってすべての分類が可能だと考えるのは，意味でさえも人間の理解から独立して存在するという，過度な自律性を言語に求めることになりそうである。また，「意味の心理的実在性」という言い方をしたが，どのような観察結果が心理学的あるいは脳科学的にもたらされれば意味を科学的に研究したことになるのか分かっていない。

[11] Wierzbicka（1999）では，喜びの感情を表すカテゴリとして happy や delight が挙げられているが，なぜか glad は外されており，その理由は示されていない。また，delight の定義として A person who feels *delighted* has just discovered that something unexpected and very good has happened（Wierzbicka 1999: 57）という説明が与えられているが，予期せぬ良いことが起こったときに happy と言ってはならない理由はないはずであり，定義としては不十分である。本文で取り上げる例と同様，非常に直観的な説明が多く，研究対象の画定にも問題が多いと考えられる。

[12] 日本フランス語学会での口頭発表。若手研究者であることを考慮し，ここでは個人が特定できる情報は記載しない。

[13] この発表で使われている理論は Martin and White（2005）などで紹介されているが，ここでは発表時の資料に基づいて分析手法を検討する。

(8)　態度評価の下位分類

a.　評価極性（positive/negative）

1. 否定的な態度を示す評価表現：誰もそのスキに誰も入ってこないのが切ない。（ママ）

2. 肯定的な態度を示す評価表現：とまどいながらも手紙へ思いを託す芝居が切ない。

b.　評価基準（affect/judgement/appreciation）

1. 感情（affect）：評価者が評価対象に対して持っている感情を基準として評価極性を示す。

2. 規範・世評（judgement）：人の習慣・性格・行動に対し規範や世評に関する判断基準（道徳・倫理・能力・信頼性・正悪など）にしたがって評価極性を示す。

3. 反応・構成・価値（appreciation）：事象に対し，美学的判断・構成の良し悪し・価値・有効性・真偽等に関する判断基準に従って評価極性を示す。

c.　表現の直接／間接性

1. 直接評価（inscribe）：態度語彙を用いて評価が示される場合。態度語彙とは, beau（美しい）, méchant（意地悪な）, s'amuser（楽しむ）など，基本的には文脈に左右されず評価極性を示す語彙。

2. 間接評価（invoke）：態度語彙を使わずに評価が示される。

(i) 駆り立て（provoke）：語彙的比喩を使う。怒りに火をつける, など。

(ii) 誘発（invite）：語彙的比喩を使わない。

示唆（flag）：程度評価を表すための語句・修辞的質問・逆説などによって評価の存在を認識させる。

事実提供（afford）：評価を呼び起こす可能性のある事実を示す表現。

確かに，人間の評価行動は人や事物などに対し，個人的あるいは社会的に決められた基準に基づいて肯定的または否定的になされ（8a および 8b），その内容は直接的あるいは間接的に表現されるものかもしれない（8c）。そして，（8a）の具体例として挙げられている「切ない」のように，同じ語を用いても，使われる文脈によっては肯定的な態度も否定的な態度も表すことがあることも事実だと考えられる。しかし，このような分類に基づいてコーパスを調査し，数値を示したとして，何が明らかになるのだろうか。説得力のある研究として成立させるためには，少なくとも三つの問題を解決しなければならない。

第一の問題は，（8）の分類の根拠が何も示されていないということである。ある言語形式が高評価，低評価のどちらにも使われることがあるというのは確かかもしれないが，判断基準を示すことなく当該の表現が「ここでは高評価」「ここでは低

評価」と言うだけでは，発表者の個人的判断を並べているに過ぎない。したがって，この分類を他者が共有することは非常に難しい。また，（8c）の直接評価で用いられる態度語彙は「基本的には文脈に左右されず評価極性を示す」と定義されているため，分析結果が個人的な判断とはならないことが期待される。しかし，たとえば méchant（意地悪な）という語であっても，常に否定的評価とは限らないことは容易に想像できる。恋人同士がちょっとした意地悪なことを言い合っているような場合には t'es méchant（（あなた，）意地悪ね）という言い方に親しみを込めることもできそうである。「基本的には」という但し書きが定義に含まれてはいるが，この但し書きが「文脈によって評価極性が左右されることもある」という事態を想定しているのであれば，この定義は結局，何も定義できていない。

次に，この分類は言語形式の分類ではないため，およそ言語表現であれば何でも評価表現として扱うことができるという問題を抱えている。もし「評価を呼び起こす可能性のある事実を示す表現」が「事実提供」という名の評価なのであれば，新聞報道などはすべてが評価表現である。つまり，なぜこのような発話を評価表現として扱う必要があるのかという，研究対象の画定の段階で疑問が出てくるのである。3.2 で検討したように，移動表現のような分類にも確かに不安定な面はある。しかし，移動事象の認定は外界の知覚に基づいているため共有されやすいといった性質があるのに対し，評価や感情という心理面に関しては共通理解が得にくいと言うことができる。

最後に，データの扱いに関する問題も指摘することができる。上述のように，この研究には研究対象がうまく限定されていないという問題があるにも関わらず，「フランス語によって書かれたブログのまとめサイトにある 10 のカテゴリから 7 記事ずつ抽出する」というデータ収集方法を採用することで，分析すべきコーパスを技巧的に絞るという方略をとっている。そのため，（8）にしたがって言語表現を分類し，各表現の数を計算することで，優勢な表現タイプを論じることなどはできるようになる。しかし，対象を有意味な形で限定することができず，分類基準も不在であるため，そこで提示される数値は何かを代表しうるものではない。恣意的に限定したデータ上で数を数え，「これがフランス語の評価表現と比喩的表現に関する形式的な制約だ」と論じても，誰も説得することはできないだろう。

前節および本節の検討から，研究対象を画定する段階で科学的手法を使うことができなくとも，分類結果の妥当性は，研究目的や分類基準をいかに共有し，それらの妥当性をいかに示すかという点にかかっていることが分かる。移動表現のような知覚現象ではなく，人間の散発的な行動に近い心理現象は「何が評価行動なのか」という点でそもそも共有が難しい。ある程度，対象とすべき言語表現を限定することが求められるということだと考えられる。

3.4. 分類の目的化

意味に基づく分類は，科学性という点で問題を抱えていても，分類目的が共有さ

れることで一定の妥当性が保証される。ここで取り上げたいのは，何らかの目的にしたがって行われる分類ではなく，分類すること自体が目的化してしまうケースである。目的化された分類の中にも，分類に対する動機や，設定された分類基準が他の研究者と共有しやすいものと，そうではないものがある。

まず，分類そのものを目的とした研究の中でも，正当化されうる分類例として梅谷（2010）を見てみよう。本学会発表要旨からの引用である。

(9)　モンゴル語ハルハ方言には，先行研究で「後置詞」として分類される諸形式がある。本発表では，これら諸形式の特徴を，(1)「後置詞」が直前の名詞と一体となって一つのアクセント単位をなすかどうか，(2)「後置詞」とその直前の名詞との間に他の要素（たとえば1「～だけ」，n'「彼の」）が入り得るかどうか等の観点から記述し，「後置詞」が有する特徴が一様ではないことを主張する。（梅谷 2010）

(9) は対象言語の記述を主たる目的にしており，そこで使われている手法も，品詞の同定方法に似た，操作性のある基準が使われている。(2) で示したように，統語的分布に基づいて分類を行っていれば，一つの形式が二つ以上の環境で現れたとしても，別段不思議なことではない。しかし，たとえば名詞の中から固有名詞と普通名詞を切り分けることで意味論上の重要な議論の土台となっているように，一つのカテゴリにまとめられている「後置詞」から異質な要素を除くことに重要な意味があるのであれば，それは貴重な下位分類になると考えられる。分類がこのような説得力をもつとき，分類を行う必要性や，分類のための手法も共有されているということができる。

だが，分類が目的であることを宣言した研究すべてについて，ただちに分類の動機や手法を共有できるわけではない。たとえば，アスペクトに基づく動詞分類を項の数や他動性といった別の基準によって組み換えることができるように，従来の分類に新たな基準を導入して下位分類を提案する，あるいは，別の観点から再分類するという研究も非常に多い。このようなものとして，3.2 でも扱った Talmy の類型論を発展させた研究を挙げることができる。たとえば，Slobin（2004，2006）では，経路ではなく，様態表現の豊富さを分類基準とした新たな類型（equipollently-framed language）が提案されている。また，今までは「行く」や「来る」といった直示動詞も，「入る」や「出る」といったその他の経路を表す動詞もまとめて経路動詞として考えられてきたが，直示動詞とその他の経路動詞を分けた上で，新たに類型を考えるというプロジェクトも進行している[14]。これらの研究の利点はどこにあるのだろうか。

分類という行為の原理から考えて，分類基準を変更すれば分類結果も変わるのは

[14] 国立国語研究所公募型共同研究プロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」。筆者も関与しているプロジェクトであり，NINJAL Typology Festa 2013（3 月 24 日）において，本文と同様の問題提起を行っている（守田 2013）。

当然の帰結である。また，経路の性質を 2 種類に分けるように，分類基準を増やせばカテゴリの数が増え，分類結果が複雑化するのも必然である。この原理から考えたとき，Slobin（2006）や直示表現を中心とした新類型で問われるべきは，新しい分類結果そのものではなく，直示動詞を経路動詞から分離する必要性や，なぜ経路ではなく様態を分類の基準として増やす必要があるのかということである[15]。確かに，Talmy の類型論に基づいて記述的な研究を行ったとき，予測される類型から逸脱した用例が多々観察されていることは確かであり，これらの研究には類型論を補完するという意義がある。だが同時に，新たな分類基準の必要性が他の研究者と共有されない限り，「分類基準を変更したら類型が変わった」「分類基準を増やしたら類型が複雑化した」ということ以外に何の成果もないと見なされる危険性がつきまとうことにもなる。

分類という行為は簡単に行うことができる。簡単に行うことができるため，分類そのものが目的となるときには，それだけいっそう研究目的の正当性に配慮し，分類の動機が共有されるように気をつけなければならないと言えるだろう。

3.5. 分類の抽象化と説明理論の妥当性

ここまでの分類は，形式や意味によって複数の言語記号もしくは言語自体をいくつかのカテゴリに分類するという方向性を持っていた。これらとは異なり，同じ形式が複数の用法を持っていることが先に認識されており，その用法間に共通する（ことが期待される）公約数的な本質を追求するタイプの研究もある。分類の一般化，あるいは抽象化である。たとえば，日本語のタに複数の用法があることは誰もが承知しているが，「果たして過去と完了のどちらが本義なのか」，「結局のところタとは何なのか」と問われることがある。これと同様に，さまざまな言語において，一つの形式の本質的意味を問うという試みがなされている。ここでは，諸用法の統一的な説明にあたって抽象化はどこまで可能なのかという観点から，フランス語の半過去をめぐる議論を検討することにしよう。

フランス語の半過去は，教育上は「過去の習慣や状態を表す時制」として説明される。典型的には次のような用法である。フランス語の該当部分をイタリックで，訳文の対応箇所を下線で示す。グロスでは半過去を IMP の記号で表す。

(10)　Il *lisait* quand le téléphone a sonné.
　　he read.IMP when the telephone rang
　　「電話が鳴ったとき，彼は<u>読書していた</u>」

[15] Slobin（2004）は主に動詞連鎖言語における様態表現を問題としている。動詞連鎖言語では，主動詞と衛星という，Talmy の方法で設けられている経路を表す要素の統語的対立が明確ではない。この点で，均等枠付け（equipollently-framed）という新類型は理論上の重要な指摘であり，単純な分類基準の変更や増加という批判は該当しない。だが，Slobin（2006）においては様態が豊富な言語かどうかという問題設定がなされており，この点については「なぜ様態を中心にした類型化が必要なのか」という説明が必要だと考えられる。

つまり「未完了過去」(imperfect past, フランス語では imparfait) である。この例において，現在との関係で事象を過去に定位しているのは複合過去 a sonné であり，半過去自体は，「過去における現在」という説明がなされることもあるように，a sonné との同時性を表しているとされる。つまり，半過去は単独では時間軸上に事象を定位しない非自立的な時制だと考えられている。

だが，半過去は，必ずしも他の過去時制を伴ってその時制との同時性を表すわけではない。以下の例のように，自立的に使われることもある[16]。

(11) a. Imparfait hypocoristique（愛玩の半過去）
（漫画の吹き出しの中で，泣いている子供をあやす人のセリフ）
Ch'est un pauvre bébé cha… il *avait* le cœur brijé…
he have.IMP the heart broken
「おーかわいちょかわいちょ，こわかったんでちゅねー」

b. Imparfait forain（接客の半過去）
（客が魚屋に入り，あいさつを交わした後に陳列台の魚を見ている。売り手が客に近づいて言うセリフ）
Qu'est-ce qu'il vous *fallait* ?
what.is.it that.IMPERSONAL you need.IMP
「何にしましょうか」

c. Imparfait d'atténuation（語調緩和の半過去）
Bonjour, je *voulais* demander si parmi vous il y a des personnes qui
hello I want.IMP ask if among you there are persons who
comme moi souffrent de ressentir vraiment trop fort les « mots »…
like me suffer from feel really too hard the words
「こんにちは。私と同じように「ことば」を強烈に受け止め過ぎて苦しんでいる人がいないか聞いてみたいのですが」

d. Imparfait d'hypothèse（仮定の半過去）
Si je vous *disais* moi, que je vous aime, que feriez-vous ?
if I you say.IMP me that I you love what do-you
「もし私があなたを愛していると言ったら，あなたはどうなさる ?」

e. Je t'attendais 型の半過去
（待っていた人が現れたのを見て）
Je t'*attendais*.
I you.wait.IMP
「待ってたよ」

[16] (a) ～ (d) の用例は Barcélo and Bres (2006) から引用し，用法名の翻訳は渡邊 (2009) にしたがっている。(e) は阿部 (1989)，春木 (1991)，東郷 (2007) などで扱われている用法である。なお，例文の引用に際し，グロスを追加した。

前述のように，半過去は過去の習慣や状態を表し，単独では事象を時間軸上に位置づけないと考えられている。しかし，（11）の各用例には，半過去で表された事象を過去に定位する要素がない。つまり，自立的に用いられているように見える上に，定位されているのが発話現場である現在となっていることが問題となる。

この問題に対するアプローチとして，現状ではおおよそ二通りの説明が試みられている。一つは，半過去を基本的には過去を表すものだと考え，（11）で挙げた用法を「本質的には過去」という地点から派生させようとする立場である。これらの例の引用元である Barcélo and Bres（2006）は，半過去が持つ時間的指令［+ passé］（＋過去性）とアスペクト的指令［+ tension］（事象を起点と終点の間で捉える），［– incidence］（事象をまとまりとして捉えない）という基本素性の組み合わせによって説明しようとしている。また，東郷（2007）は，事柄や行為のレベルに加えて認識レベルの時間の流れを設定し，他の時制との関係も考慮しながら統一的な説明を目指しており，やはり半過去の過去性を保持しようとする姿勢が見られる。もう一つは，過去ではなく，話者の把握の様式を第一原理とし，（10）の過去も（11）のようなモーダルな用法もそこからの派生で説明しようという立場であり，春木（1991）や田中（1999）がここに含まれると見ることができる。

ここで検討したいのは，果たしてこのような「統一的説明」がどこまでの抽象化を許すのかという点である。半過去という一つの形式が（10），（11）のすべての用法を担っているのは明白な事実であり，形式が同じであれば，このような多様な用法を持ちうる原理を説明したいという動機は非常によく理解できる。また，実用性という動機に根差しているとしても，もし本質的な意味と各用法との派生関係が明瞭に説明できるようになれば，外国語教育上の効果も期待できる。だが同時に，現状では，説明するために用意された装置があまりにも複雑になってはいないだろうか。科学的研究において，新たな説明理論は現状より説明力が高まることが期待される。しかし，時間的指令とアスペクト的指令という素性による説明にせよ，「視点の移動とそれにともなって発話空間とは別の認識空間が構成される」（春木 1991: 82）といった説明にせよ，新たな説明理論が事態を複雑化させてはいないかという疑念が拭いきれないのである[17]。

説明理論の難しさという点に関して，福井（2012: 28–29）は「生成文法は難しい」という他分野の研究者からの批判に次のように答えている。

---

[17] この「認識空間」に関して，春木（1991: 82）は「メンタルスペース的なものと考えてもらって差し支えない」と述べている。まず，認識空間にせよメンタルスペースにせよ，その実在性は問われなければならない。また，仮に心理的実在性を認めたとしても，なぜ他の時制が認識空間を開かず，半過去に限定されるのかという疑問にも答える必要がある。もしかすると，他の時制も異なる認識空間を開くという前提のもと，当座は半過去に限定して議論しているだけなのかもしれない。しかしそうであれば，各時制が別々の認識空間を開くことになり，結局，文の数だけ特殊な認識空間があることになる。つまり，分析対象の数だけ説明装置が必要になり，そのような説明装置が説明理論でありえるのか，事態を複雑化させているだけではないのかという疑問を避けることはできない。

> 研究の内実を理解するためには段階をふんだ，ある程度の「努力」が必要である。研究成果の蓄積がある分野ならすべて同じであろうが，他の分野の研究者がちょっと覗いて，自らの分野とのアナロジーで簡単にわかろうとして，なかなかそうはいかない程度には生成文法も「難しく」なってきている。量子力学と同じように扱ってほしいとは言わないが，「生成文法は簡単には理解できない。だからダメだ」と言われても答えようがないのも事実である。

ここでは，量子力学と生成文法の難しさが同種のものかどうか検討してみる必要がある。公平に見積もって，言語を脳内に存在する自然現象とする見方（結論での引用を参照）は言語学の一部で採用されているだけであり，すべての言語学者に共有されてはいない。他方，量子力学は一部の物理学者のみが支持しているのではなく，ほとんど標準的な説明理論である。つまり，この「説明理論の共有の度合い」という点で両者は大きく異なっている。

半過去をめぐるここでの議論と生成文法，そして量子力学の間には直接の関係はないように見えるかもしれない。しかし，研究目的がどの程度共有され，開発された説明理論にどの程度の普遍性があるかという点で，同じ問題を抱えてはいないだろうか。つまり，身も蓋もない言い方をするならば，「無駄に難しい」と思われるか，「難しくても必要だ」と思われるかという違いである。研究目的と説明理論はおそらく相互依存の関係にある。研究目的が共有されていなければ，複雑な説明理論は無駄に難しいと感じられるようになり，普遍性からは遠ざかる。逆に，説明理論に説得力があれば，難しくとも広く使われることになり，研究目的も共有されやすいという側面もある。

この観点から，半過去の説明で展開されている理論にどの程度の共有可能性があるのか検討してみる必要はあるだろう。福井が生成文法を擁護して言うのと同じように，フランス語学者が「フランス語学は研究成果の蓄積がある分野だから素人には分からないだろうが云々」という説明を行ったとして，説明を受けた人からはどのような反応が返ってくるだろうか。

場合によっては，研究対象とする現象に応じて，無理に統一的な説明をする必要はないという視点を持つことが必要なのかもしれない。

> カメレオンの本当の色は何だろうか。もちろんそんな色などがないことは誰でも承知している。木の葉の中での緑色，岩場の上での茶褐色，それぞれその場その場の色のどれもが真実の色であって，その中でこれこそ本物の色だというような色はありはしないからである。（大森 1981: 25）

カメレオンは何色をしていてもカメレオンと認めることができ，どのような色も真実である。ある一つの言語形式は，どのような用法を持っていても，音形が同一であればその形式だと同定でき，同時に，その用法のどれもが真実である。カメレオンであれば，周囲の色との同化という「動機」や，変色のシステム自体は生物学的

に説明可能であるが，このような事実の解明と，「本当の色は何なのか」という問いのあり方の間には何の関係もない。決して，目に見えない「本当の色」からの派生として緑色や茶褐色があるわけではない。

半過去の本質的意味を求めるという問題の設定方法は，「カメレオンの本当の色は何なのか」と問うことに近くはないだろうか。言語の場合，語源が判明していないこともあれば，絶えざる接触と変化，そしてアナロジーなどによって意味や用法は拡張や縮小を繰り返しており，一つの形式が持つ複数の用法がどのように発達してきたのか分からないこともある。おそらく，半過去に関しては，現状のテンスやアスペクトに対する理解では統一的に説明できないため，新たな時制体系を構築する方向に向かうしかないと考えられる。しかし，新たに開発される説明理論には，一部の用法を例外として扱うことで維持されてきた，現状の時制体系によって得られている理解（のしやすさ）を著しく損ねてはならないという要請が課されるのではないだろうか。

本質的意味を求める研究を否定するつもりはない。本質を追求し続けることによって，いつかテンスやアスペクトに関する私たちの認識が大きく様変わりするときが訪れるのかもしれない。そのとき，各用法をつなぐ論理もうまく説明できるようになる可能性は決して否定できるものではない。だが，このような研究が掲げる目的や，そこで使われる説明理論がどの程度共有されうるものなのか，改めて検討してみる必要もあると思われるのである。

4. 結論

言語の形式面に着目し，個別の言語記号の分布を対象としたとき，言語学でも科学的な自然分類を行うことができる。他方，分類基準として意味を用いると，自然分類はもはや不可能であり，恣意的な側面が立ち現れてくる。しかし，厳密な分類基準を設けることができず，操作性のあるテストと恒常的な観察結果という要請に応えることができないときにも，分類に一定の共有可能性や説明力があれば，その共有可能性や説明力自体が分類の根拠になるだろうというのが本稿の結論である。

この結論を踏まえて，最後に，「言語学は科学か，科学であるべきか」，「言語学の目的は何か」という二つの問いについて，どのような答えが可能であるのか検討してみたい。まず一つ目の問いについてだが，前述のように，意味的分類の可能性は，分類の背後にある目的や分類基準がうまく共有されるかどうかという点にかかっている。「言語学は科学なのか」という形で問いを発するなら，「科学として研究できる対象と，できない対象がある」という些か平凡な答えに落着し，「科学でなければならないか」と問うならば，「科学である必要もない。そこに共有可能性や説得力があれば」ということになる。

言語学が科学であることを謳う入門書は多い。筆者も「言語学はことばの科学だ」というかけ声のもと教育を受けてきており，科学であることを謳っていない概説書は，少なくとも筆者の手元にはない。物理学ほどの科学でないにしても，あくまで

自然科学を目指すべきであると説く論者もおり，福井（2012: 19–20, 24）では次のように述べられている。

> 生成文法理論においては「言語の普遍性」は，様々な「言語」を調べた結果得られる機能的・経験的確信としてではなく，それがもつ心理学的・生物学的アプローチからいわば必然的に帰結する主張であることになる。（中略）ここで注意したいのは，I 言語にせよ UG にせよ，決して言語学者が説明の便宜上作り出した仮構ではなく，実際に人間の脳内に実在する「自然物」であるということである。かくして，生成文法においては言語学はヒトの脳内に実在する UG という自然現象を対象とする学問であるということになる。

> 「科学的認識」が人間の持つ多様な認識様態の一種に過ぎないのは事実だが，同時にそれが他の種類の認識の仕方にはない「切れ味」のようなものを持つことも確かであり（「普遍性」と「深さ」というふうに言ってもいいと思う），人間の全的理解のためには，人間に対する科学的アプローチを頭ごなしに否定してしまうのは明らかに得策ではないであろう。

「普遍性」や「深さ」として表現されているように，科学的認識は広く共有され，確証された場合には強固に持続する。これは，品詞分類が 2000 年以上にもわたって受け継がれてきていることからも明らかである。そして，一面においては，言語を脳内の自然現象として捉えるという見方も否定できるものではない。ただ，福井も伝統的な言語研究を否定しているわけではないように，本稿ではとりわけ意味的な分類を検討してきた結果，言語のすべての側面について科学的に研究ができるわけではないという結論にたどりついた。意味の問題は「どのような基準に基づいて分類できるのか」「意味の構造はどうなっているのか」という問いにはほとんど馴染まない。むしろ，意味的な分類の成立過程と説得力の備え方という点から見ても，「意味は人々の間でどのように共有されているのか」，「いかにして共有可能となっているのか」と問うべき性質を備えていると言えそうである。意味の研究も科学的に可能だと主張する研究は，おそらくは言語の意味的な側面を矮小化し，科学的に扱える範囲でのみ意味を捉えようとしているだけである。少なくとも現状では，意味的分類の妥当性を科学的に証明することはできていない。

最後に，「結局，言語学は何を目的としているのか」という，もう一つの問いについても見解を述べておきたい。第 3 節での検討が示すように，言語学の対象は個別言語の構造の記述から時制体系の解明，類型論，そして UG のようなものまで多岐に渡り，それぞれの研究者がまったく別々の研究目的のもと，言語学と名づけられた分野に同居しているのが実情であり，科学的なものからあまりそうではないものまでの混合体となっている。そのため，「目的は何なのか」という問いに，特定の研究対象をもって答えることはできない。意味的分類の妥当性を検討してきた結果として言えることは，言語学に課された要請が「科学であることを目指す」こ

とや「科学を装うために理系的手法を取り入れる」といったことではないということである。本稿のように意味を重視する立場からは，言語の意味が科学性にこだわる態度を拒否させると言うことになる。

言語学が科学であるという見方に賛成であれ反対であれ，言語学を科学と捉えることで何を明らかにでき，何を明らかにできないのか検討することは必要である。その上で，科学と非科学の境界にこだわるようなことはせず，言語に関する人間の営みを広く共有されうることばで自由に論じていくのが言語学だということが，もう一つの問いに対する本論文の答えである。

参　照　文　献

阿部宏（1989）「Je t'attendais 型の半過去について」『フランス語学研究』23: 55–59.

Barceló, Gérard Joan and Jacques Bres (2006) *Les temps de l'indicatif en français*. Paris: Ophrys.

Condillac, Étienne Bonnot de (1746) *Essai sur l'origine des connaissances humaines*. [Œuvres philosophiques de Condillac, vol. 1, texte établi et présenté par Georges Le Roy. Paris: Presse Universitaire de France, 1947].（古茂田宏　訳（1994）『人間認識起源論』東京：岩波文庫.）

Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and causal structure*. Oxford: Oxford University Press.

福井直樹（2012）『新・自然科学としての言語学――生成文法とは何か』東京：ちくま学芸文庫.

Gosselin, Laurent and Jacques François (1991) Les typologies de procès: Des verbes aux prédications. *Travaux de Linguistique et de Philologie* 29: 19–86.

春木仁孝（1991）「Je ne savais pas que c'était comme ça――再確認の半過去」『フランス語フランス文学』59: 76–88.

岩本遠億（2008）『事象アスペクト論』東京：開拓社.

Jackendoff, Ray (1985) Multiple subcategorization and the theta-criterion: The case of *climb*. *Natural Language and Linguistic Theory* 3: 271–295.

鎌田修（2000）『日本語の引用』東京：ひつじ書房.

Kuhn, Thomas S. (1962) *The structure of scientific revolutions*. Chicago: The University of Chicago Press.（中山茂　訳（1971）『科学革命の構造』東京：みすず書房.）

Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: The University of Chicago Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1992) The lexical semantics of verbs of motion: The perspective from unaccusativity. In: Iggy M. Roca (ed.) *Thematic structure: Its role in grammar*, 247–269. Berlin/New York: Foris Publications.

Martin, J.R. and P.R.R. White (2005) *The language of evaluation: Appraisal in English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

松本曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』125–230. 東京：研究社.

Morita, Takahiro (2009) La catégorisation des verbes de déplacement en japonais et en français. Thèse de doctorat non publiée, École des Hautes Études en Sciences Sociales.

Morita, Takahiro (2011) Intratypological variations in motion events in Japanese and French: Manner and deixis as parameters for cross-linguistic comparison. *Cognitextes* 6, Association Française de Linguistique Cognitive (http://cognitextes.revues.org/498).

守田貴弘（2013）「フランス語のダイクシス表現の方略」NINJAL Typology Festa 2013 口頭発表，国立国語研究所，2013 年 3 月 24 日.

大森荘蔵（1981）『流れとよどみ――哲学断章』東京：産業図書.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2010) Reflections on manner/result complementarity. In: Malka Rappaport Hovav, Edit Doron and Ivy Sichel (eds.) *Lexical semantics, syntax, and event structure*, 1–38. Oxford: Oxford University Press.

Rosch, Eleanor and Barbara B. Lloyd. (eds.) (1978) *Cognition and categorization*. Hillsdale: Laurence Erlbaum Associates.

Ruwet, Nicolas (1991) *Syntax and human experience*. Chicago: The University of Chicago Press.
Slobin, Dan Isaac (2004) The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In: Sven Strömqvist and Ludo Verhoeven (eds.) *Relating events in narrative, vol. 2: Typological and contextual perspectives*, 219–257. New Jersey/London: Laurence Erlbaum Associates.
Slobin, Dan Isaac (2006) What makes manner of motion salient?: Explorations in linguistic typology, discourse, and cognition. In: Maya Hickmann and Stéphane Ropert (eds.) *Space in languages: Linguistic systems and cognitive categories*, 59–82. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Smith, Carlota S. (1997) *The parameter of aspect*. Second edition. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
田中善英（1999）「フランス語動詞直説法時制体系試論」獨協大学大学院外国語学研究科『フランス語フランス文化研究』7: 65–97.
Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, vol. 2: Typology and process in conceptual structuring*. Massachusetts: MIT Press.
Taylor, John R. (2003) *Linguistic categorization*. Third edition. Oxford: Oxford University Press.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版.
東郷雄二（2007）「Je t'attendais 型半過去再考」『フランス語学研究』41: 16–30.
梅谷博之（2010）「モンゴル語の『後置詞』の特徴」日本言語学会第 141 回大会口頭発表［発表要旨は『言語研究』139: 172 に掲載］.
Vendler, Zeno (1957) Verbs and times. *The Philosophical Review* 66: 143–160.
渡邊淳也（2009）「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43: 77–83.
Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across languages and cultures: Diversity and universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
山口裕之（2002）『コンディヤックの思想』東京：勁草書房.

執筆者連絡先：
〒 112-8606 東京都文京区白山 5-28-20
東洋大学経済学部総合政策学科

［受領日 2013 年 1 月 8 日
最終原稿受理日 2013 年 8 月 24 日］

Abstract

On the Scientific Acceptability of Semantic Categories

Takahiro Morita
Toyo University

The aim of this paper is to investigate the foundations of various linguistic categorizations and to discuss how to justify categories based on meaning. Although linguistics is generally considered to be a science, not all categories proposed in the literature can meet the scientific requirements for categorization, according to which categories must be identified through some verifiable operations and defined by invariant results. This is especially the case with categories based on meaning, although they are indispensable for linguistic research. What, then, ensures the validity of semantic categories such as verb classes? This paper claims that such categories are justified insofar as (1) the motivation for the categorization is shared by linguists and (2) the categories can provide a better explanation for a wide range of linguistic phenomena, beyond those that motivated the categorization in the first place.